歴史的時間の問題（ジンメル）

高坂正顯譯

理論的な學としての歴史の對象は――現在存在する事柄並に將來の事柄と異つて――かつて起つた事柄であるから、確に時間は歴史概念の重要なる一部分に屬する。しかし時間が歴史概念を形成する他の要素に對して如何なる關係に立つか、又如何なる特異の意味を歴史に於て有するかと云ふ事は、今迄の所望ましき程度には明瞭にされてをらず、否かなりの度合の明瞭さにさへ達してゐない樣に思はれる。

我々がある實在內容を歴史的なものと見てゐる際には、その實在內容は我々の時間體系 Zeitsystem の內に於て一定の限定された場所に結びついたものとして考へられてゐるのである――その際この限定の精密の度合には樣々の場合があり得る。之は自明にして平凡なる事柄であるが、一層深く一層廣き定義とも見ゆる形式的なる歴史の定義に對して、かへつて一層意味ある定義である事が明になるであらう。

まづこの定義に基いて次の誤まれる主張が排斥される、卽ちある實在內容がかつていつか存在してゐた事があるからと云つて、直にその事實だけで之を歴史的なりと主張する事が出來なくなる。例へば樣々の興味ある事物に滿たされた埋沒せる都市がアジアのどこかで發見されたとする、しかしその都の舊跡は、その樣式によつても、又何等か直接或は間接的な證據によつても、いつの時代

のものかは少しも指示されなかつたとする――勿論その場合にもこの遺跡は樣々の點に於て極めて價値あり意味あるものであらう、――がしかし歷史的な材料とは云はれぬと思ふ。單に時一般の內に存するのみで限定された時の內にない以上、歷史的には空虛な空間にあるからである。そしてたとへ我々が啓示によつて、今とりあつかはれてゐる遺跡が他の點に關しても我々に知られてゐる一民族の遺跡である事を知り得たにしても、その遺跡がこの民族の發展の內に於て、いかなる時代に屬するかを確定して示す事が全然不可能であるならば――勿論かういふ事は具體的には實例がないであらうが――それは尙依然として歷史上の記錄ではないのである。

所が我々の理解作用（フェルステーエン）にはその本來の性質上實在內容に歷史的と云ふ性質を與へる力が缺けてゐる。

無論理解作用は、ある內容を歷史的のものとして承認するためには、不可缺の制約であるには違ない。例へばある人の行爲が傳へられた時、その行爲自身は可能的なものであるにしても、彼の平生の性格に對して全く「理解され難い」たちの行爲ならば、我々はそれを歷史上の事實として受取るのをこばむのである。單にある存在なり出來事なりにその名稱を付して、例へばある出來事を戰爭とし或は運河の開設とし、又或る行爲を統治とし或は生產なりとする場合に、のみならずそれを不可解なるものと稱する場合にすら、原理的なる理解作用が根柢に橫つてゐるのである、卽ち單に潛勢的（ポテンチエール）な歷史的存在たるためにも、ある程度の理解作用が要求される、理解作用を缺いではそれ等の物は性質を附與し得ず、從つて他と區別し難きxとなつてしまふであらう。

しかるにこの理解作用そのものは、一見矛盾の

感があるが、歴史的實在そのものとは何等の關係も有しない、否全く時間を含まぬものなのである。パウロの性格を、或はザックゼンのモリッツの性格を「理解する」作用は、オセロ或はウィルヘルムマイスターの性格を理解する作用と根本的に全く同じものである。それ等の性格を形成してゐる要素を一つの連絡あるものにまとめて理解する事、即ちそれと同感（ナッハフユーレン）する事は全く、その觀念的（イデエール）内容に對してのみ行はれるのであつて、その觀念的内容を一つにまとめた時、直にそれの理解が成立するのである、その内容が更に實在の範疇の下にあるか想像の範疇の下にあるか、現在の範疇の下にあるか過去の範疇の下にあるかは全く問題にならない。自分がパウロを理解するのは、その歴史的實在性によるのではない、言はば反對に、その觀念的（イデエール）に分離し得る内容のみを、その歴史的實在性に關して理解するのである。その存在、實在性そのものは、理解されるものではなくして附加さるるものである。しかして歴史的時間は、全く實在形式であるから、理解作用は完全に歴史的時間を離れて活動し得るのである。とは云へかかる觀念的（イデエール）なる内容相互の關係から、ある内容の事實存在（リアリテート）せしものなる事を導き出す事もあるのであるがその折には我々は單に、既に他の方法に於て一方に確定した實在性（リアリテート）を他のものに傳へるに過ぎぬのである。

尤も、理解作用そのものがしば〳〵時間關係を包藏してゐる場合がある、例へば理解作用の對象が、一現象が、他の現象からの因果的生起である如き場合もあるが、之の事は別に以上の認識を破壞するものではない。その際には丁度この一群の現象が理解の統一 Verstehenseinheit を構成するのである、時間關係が、即ち繼起と持續とに關して必然的に規定された時間關係が、ここではそれ自

ら理解されんとする内容になつてゐる、しかし一定の要素間の關係に向けられたこの理解は、その要素の全體が、我々の暦の上に於て如何なる場所を占むるかには、少しも依存してゐない。何故かと云へばその一群の要素が理解されるのは、それが一定の時點にあるからではなく、その内容が相互に制約するからである。理解された一群の事實に含まるるこの内在的時間は、歴史的時間ではない、むしろ自然科學的時間、――卽ち自然科學の實驗に於て、その長さの測定をなす必要はあつても、いつその實驗がなされたかと云ふ暦の上の日附とは、何等の關係なき自然科學的時間に類するものである。之の主張に對して經驗上不可能なりと反對する人あらば、そは余の主旨(モチーフ)を全く誤解するものである。彼は云ふ、ある種の出來事は全く一定の時點に起つたものとしてのみ理解される事が出來る、キリスト敎が流布したのは丁度其の

當時には存在してゐたが、その前後に見るを得ない古代人のある心的狀態に會した爲であつたとか、或は、バロック藝術の出現は、文藝復興の特殊な力が消え行きし時にのみ可能なのであるとか。その通りである。之等の場合に於ては、そこに理解せらるる事實に時間上先だつ條件は、今述べ來つた理解の結合 Verstehenskomplex を形成してゐるのである。もしも我々が既にバロックの現象をその内容に關して充分に理解してゐて、いかなる任意の時間にバロックの結合體をうつしても、その理解が變化しないほどになつてゐるなら、このバロックと云ふ現象の範圍は今や文藝復興期にまで擴張される事になり、理解作用も亦單にバロックの要素間に働くにはあらずして、それと文藝復興期との間に働くに到り、兩者はここに理解の統一を構成するに到る、かくしてここに内面的に當體的に理解さるる理解の統一を構成するが故に、そ

れが歴史的時間のいかなる場所に屬するかと云ふ事からは、全く影響を蒙らないに到る。尤も文藝復興が更にそれに先だつ中世時代の狀態をまつて初めて理解されると云ふ事になれば、自足的な內容の群はここまで擴げられなければならない。しかしその際にはこのより大なる新な一群も亦純粹にその內容の上から理解される譯になるであらうから、その時代が實際の經驗に於て實現されたのが、事實千年早かつたにしても、理解そのものには何の變りもない事になる。何故と云ふに、もしその事によつて理解が進められ或は阻まれるならば、正にこの理解の對象、他のものではないこの同一の內容が、時間上轉置さるべきであると云ふ前提と矛盾するに到るからである。

しかし原理的には、いかなる說明の要素も、之こそ最終のものであるとは言へないで、常にそれ自らの理解のために更に先だつものを要求するから、かくて理解の統一（フエルステーエンス・ヅインハイト）は要求としては無限に、事實上に於いては我々に知られ得る最も古きものにまで延びて行くのである。歷史に於て我々に知られてゐる事柄が、完全に因果の系列に縛られてゐるものと假定すれば、この出來事の全體があつて初めてあらゆる個々のものを理解するに足る一つの群が成るのである。がしかし、この內在的な當體的理解作用（ハリツヒ・フエルステーエン）によつて結合された群が——事實上の心的所有として或は假定上の心的所有として——生ずるその瞬間に、今迄主張してきた理解の統一（フエルステーエンス・アインハイヂン）相互間の時間的關係が完全に變化する。完了的なものとして理解さるとされたあらゆる個々の「理解の統一」は、其の性質を變ずる事なく時間系列のあらゆる任意の場所に置かれ得るものであつた。しかし今やこの全體が、知られ得る限りのあらゆる內容を包括するに於ては、その全體を他の時間に移す事は最早出來ない。その全體の前後には、

――我々にとつて――今や空虛な時が存してゐてそこでは位置の變化はあり得ないからである、そは空虛なものと考へられた絕對的空間に於いては個々の物體は何等の位置を有し得ない如く、空虛な時間に於いても、すべての場所は他から區別されないからである。物體がただ相互に對してのみその位置を決定し得るのであつて、全物體界に對しては、それの位置を定めてやる如き他の物がなき故に、全物體界が空間的位置に關はらぬ如く――時間は歷史內容相互の關係であつて、歷史の全體は時間から自由なのである。

ここに到つて初めて我々は、それ〴〵に一箇の完結した歷史的結合體である所のものを、內容の理解をさまたげる事なく時間上移動し得るものたらしめる、かの人爲的な構成 Hilfskonstruktion の意味並にそこに含まれる矛盾の何たるかを理解するのである。と云ふのは次の事情が明になつたからである、この構成作用が統一を求めて進んだのは、互に統一をなさしむる事によつて相互を理解せしめん事を志ざしたのである、しかるにこの働は單に準備的斷片的のものであつて、それが完全な程度に於て表はれるには、かかる群が――我々がある事件を完全に理解するのはその結果をも知る事によつてであるが故に――時間の二つの方向に向つて我々の知識の極限にまで及ぼされねばならなかつた。この事情が明になつたので、この全體の系列に於ては、あらゆる內容に對してその位地が根本的に確實に且つ否み難く確定される事になつたのである。そこでかの不自然な構成の意味と矛盾とか理解し得る事になつたのである。自足的なるものとしての小なる結合體は任意に移動せしめられ得た、その要素のみが相互的に不動であつたのである。今やこの不動性 Festigkeit を出來事の全體が獲得したのである。確に今尙理解作用

は時間を離脱した內容に關はつてゐるのであつてその限りに於て任意の時點に於て起り得る內容なのである。けれどもこの任意性を實際に適用するわけには行かない。そはその部分的な區劃に於ては既にあらゆる內容に屬してゐた確固たる定位が、この規定を論理的に展開した結果、今や歷史的全體の內にある事になり、否ただその內にのみあり得る事となつて、この全體の內に於ける移動はこばまれる事になつたからである。純粹に事實內容Sachgehalt から生じ、かるが故に外面的な絕對的時點には無關心な相對的時點の規定は、その時點が知り得る內容の總體への關係として定められた時に、初めて完結せるものとして表はれるのであつて——それによつて、存在或は出來事の單なる內容に基く規定が、その事柄の絕對的時點に轉ずるのである。ここに云ふ絕對的時點とは、我々に知られ得る最古より最近までの出來事の系列に於て、規定されると云ふ意味である。

以上によつて自分の出發點に含まれてゐたアンチノミーが解決せられる。ある內容が歷史的なものとして妥當し得るのは、それが時間上確定された場合に於てのみであると論じた。しかも又他方その內容は他のものと共に理解の統一 Verstehens-einheit をなす時にのみ歷史的なのであるとなしたのであつた、所が時間に關せざる事實內容のみが理解作用を規定すると云ふのであるから、その理解の統一は理解を何等か減ずる事なしに任意の時點に移され得る事になりはしないか。とは云へここに存する矛盾は次の洞察によつてとり除かれる、理解作用は生起した內容の全體を己れの內に吸收し得た時に初めて充全であり、而してこの理解し得る樣に配列された全體はそのあらゆる部分內容に對して單に一つの場所をほか許さないのである、それ故いかなる空想的の移動も許されぬ事になつ

たのである、けだしあらゆる部分内容がそれに續行する各々の場所は、既にある動かし難き内容によつて占められてゐるからである。そこで我々は次の如くに言ひ得る、ある出來事が歴史的なりと云ひ得るのは、その時點には全く無關係な當體的（ザッハリッヒ）な理由によつて一義的にある時點に固定された時に限るのであると。從つてかうも云ひ得る、ある内容が時間の内にあると云ふ事だけでその内容が歴史的になるのではない、又その内容が理解され得ると云ふだけで歴史的になるのでもない、むしろ兩者が切り合ふ際に、卽ちその内容が時間（ツァイト）を離（フライ）れた理解作用の根柢の上に時間化された時に、初めてその内容は歴史的となる。しかし絶對的全體との關係に於てのみ個々のものは眞に理解されるのであるから、時間化されると云ふ事は、原理上理解作用が内容の總體を把束した時にのみ可能である。之の事からしてひきつづいて又時間化されると云ふ事の意味は、茲では限定されし時點へ固定されると云ふだけの意味にすぎぬ事が明になる。何故かと云ふに一面に於ては、この時間化が出來事の全體を根柢にして生じた際には、すべての出來事がいかなる他の者とも換へ難きただ一つの位置を有する事になるからであり、又他方に於ては理解作用は時間の内に於てそれ〴〵の内容に一定の位置を指示し得るのみで、單に時一般の内におく事は出來ぬからである、――と云ふのは時間一般の内に置くと云ふ事は、單にある出來事がとにかく現實に存してゐた事を示すだけであつて、理解作用にとつてこの事は不可能な仕事だからである。

ある内容が限定された時點に固定される事によつて歴史的のものとなると云ふ規定を定める事によつて、既に以前から自然科學的認識に對して歴史的認識の特長を擧示するよすがとなつてゐた個別化性（インディヴィヂュアルハイト）の特性が初めてその正當なる位置に於

いて現はれるのである。人々はこの個別化性を常に生起した內容の一回性（アインマーリヒカイト）の內に求めてきた、しかして之に對して自然科學は、その內容を時間なき一般的法則に關して眺めるとなしたのであつて、法則にとつては、それが一回だけのものか任意に繰り返し得るものかは全く問題にならぬとされてゐた。が此事は自分には尙決して決定的の規定ではないと思はれる。その相對的な完了性に於て獨立に理解され得る、さきに述べた一群の出來事を、我々が有した際に、我々はその理解を損ずる事なくあちらこちらへ任意に移動させ得るのである、しかもその內容に關しては全然一回的なる事もあり得るのであつてその時間上の不安定を去つて出來事の全過程の內に於ける一義的に確定された位置を得來らぬ限り、我々はその一回的のものをすら尙歷史上の一片とは見ないのである。「ある出來事が歷史的なる性質を有するのは、その內容が一回限りのものである事に負ふのではない。それ等の出來事は、全く同一の性質を具して千回となく繰り返へされても、尙歷史的のものであり得ると考へられるから。」かくの如き主張は恐らくは之のモチーフが姿をかへたものにすぎぬと思ふしかして一回性と歷史性とを同一視せんとする考へに於ては、すべての繰り返しは——最後の審判に於けるそれさへも——世界過程の全體の內に包含されてゐて、その一部分に於て生ずると云ふ事から、その過程の全體は決して繰り返へされぬものであると云ふ結果を生ずるため、この一回性が誤つて一々の部分にも推し及ぼされてゐるのである。原理上は內容を全く等しくして無限に多くの事が起り得るから、一回性或は個別性と云ふ事を內容に關係したものとすれば、その意味は理解し難いものになる、それが、時間概念の本性上決して繰り返される事なきこの時點の內に、正にこの

内容が存すると云ふ意味に見て、初めて理解されるのである。自分に先だつすべての者と、自分に續くすべての者との間に介して確定されたる時點のみが、歴史的内容に今論ぜられつつあるこの性質を與へるのである。と云ふのはかくしてのみ初めて、その内容は我々に知られてゐる唯一の絶對的非反復性、即ち世界過程の總體の有する非反復性を分有するからである。(我々の認識が、この總體へ關係づけて規定する事に於ていかに不完全であらうともそれは大して問題にならない。)之の總體の出來事がある内容にその位置を規定するのである。――從つてその位置は全く唯一無二のものにならざるを得ない、その内容がたとへ性質的には個別的のものである事もあり、或は反復するものである事もあるであらうが。ある認識内容を歴史的のものとなす所以の個別性が失はれるためには全く時間の性質一般を失はねばならないと見るのは誤である。歴史的個別性を失ふためにはある一定の時點の缺乏で充分である、一定の時點のみが歴史的唯一性の支持者である、ただその時點を一義的に決定するためには内容が一義的に個別的であらねばならぬのである。

ある過程が單に時間的性質を有する丈で、確定された時點の性質を有せぬ折には、決してその過程は歴史的のものとはならない。當體的(ザッハリッヒ)な根據に基く時間上の關係は、化學或は物理の過程の内に於てさへ支配する。實驗室の内に於て、振動や化學的の變化や或は精神物理的の反應の繼續やが測定さるる時、そこに於ても始と終り、從つて又中間の段階が、ある時間延長 Zeitstrecke 上の限定された點の上に固定されるのである。ただしかし、この當體的(ザッハリッヒ)に規定された時間的統一は、己に先だち或は己に續くいかなるものに對しても少しの關係も有さない、否之等の自然科學的認識に於て

は、その問題呈出の性質上本來關係を有する事が出來ぬのである。この出來事がいつ一つの全體として起つたかと云ふ問題、從つて先なるものと後なるものとに對しいかなる關係を有するかと云ふ事は、この時間認識には全くどうでもいい事である。されば こそこの出來事は歷史的のものではないのである。併しもし、或一つの學問のそれからの進歩にとつて新な道を開いた最初の實驗が問題になる時には、その位置を包容的な時間過程の内に定める事、卽ちその學の先の狀態並に後の狀態に對して定める事は、ただちに認識上重要な事となるのである、言ひかへればその折にはこの實驗された自然過程が歷史的のものになつてゐるのである。それ故この出來事は立場の相違によつて、歷史的時間性とは異る時間性をもつ事もあり、或はそれに先だつものと續くもの、從つて原理上世界過程の全體によつて固定されてゐる歷史的時點を示す事もあるのである、——世界過程の全體に規定されて初めてある時點が歷史的のものとなるのである。

この世界過程に於ける固定は、一見自明的とも見え、從つて既に用ひられてゐた仕方で表現されてゐるが、事實に於てその仕方は、決して自明的とは云へぬ歷史的範疇の說明に役立つのである。なかんづく持續(ダウエル)の概念の說明に役立つのである。何故かならば我々が、ある狀態が時間上持續すると云ふ時に、その意味せんとする所は、正確に觀察すれば、決して論理學或は物理學に於ける固執 Beharrung —— 一定の狀態の不變化的持續 —— とは同一でない。時間上の持續と云ふ事を後者の意味にとるならば、之の持續の長さはどうでもいい事になる、一見矛盾とも見えやうが、ある狀態が一年その狀態を變じなかつたか、十年變じなかつたかは歷史的には全く重要でない。何故かと云ふ

に、かかる文化的、社會的、個別的なる存在期間Existenzperiodeが、その狀態を持續する場合に、固執（ベハレン）と云ふ概念の要求する如く、そのいかなる瞬間も互に區別されず、從つてその時代の始めと終りとは性質上全く合致するのであるならば、はたして如何なる興味がその時代の長短に結びつき得べきか、自分は解し得ぬからである。その時代の內に於ては、すべての瞬間が內容上等しい故に、どの瞬間も他のものに對して、內容によつて決定された先後を有し得ない、卽ちこの持續の內に於ては如何なる瞬間も歷史的ではないのである。統治の經續、憲法なり經濟組織なりの持續が我々にとつて重要である時には、我々はその持續と云ふ事によつて、相互に時間上交代する個々の出來事の多樣を考へる、少くともその時期の終りに到つてその一群の狀態が變化した事を意味する、卽ちそれに續く新狀態が、初期の狀態を既に脫せしと見らる過去の狀態によつて理解さるゝ事を意味する。ある全くの暗黑時代に關して、ある王が三十年間統治したと云ふだけの消息のみが傳はつてゐる時に、その報告は、統治の長さが十年であつたと傳說が傳へる場合に比して歷史上少しもより多くを語るものではない、――無論之は、この單に無內容なる時間持續の內及び外に於て、互に前後を區別され得る個々の出來事が、將來發見され得る可能性なしと假定した場合の事である。フリードリッヒ大王が一七五六年に始めた戰が七年間經續した事を知つてゐるにしても、もし其七年間が、理解し得る樣に經起する所の出來事によつて滿たされてゐない時、或は大王によつて惹き起されたヨーロッパ政局の轉變を知らない時には、七と云ふ數は大きいとも小さいとも云へる一つの數を示すに過ぎないであらう。我々に歷史的に知られ得る最後の要素と見られ得る出來事、卽ち我々に

とつてその部分が何等内容的に満された先及び後なるものとして現はれず、又彼に外面的なる他の系列との組み合せによつて之の缺陷を補ふ事もせざる出來事――かくの如き出來事が何等か時間的の擴がりを有すると云ふ事は、歴史的には全くどうでもよい事なのである、何故かと云へば、どれだけ長さがあるかが問題にはならぬ長さは、實は長さではないからである。かくの如き出來事は歴史的分子 historisches Atom であつて、それをして尙歴史的のものたらしめる所以はただただ第二のものには先だち第三のものには後れると云ふ事によつてのみである。さてある出來事が時間點 Zeitpunkt にあると云ふ言ひ方は、適切な象徴的言ひ表はしである、何故と云ふに、正確に觀察すれば、歴史的な意味での持續は、先だち或は後れると云ふ關係に分解され終つて、各々の要素に對しては單にとにかく存してゐる、卽ちこの·點·に·ある·と云ふ點的性質、die Punktualität des einfachen Überhaupt-Daseins, d. h. an-dieser-Stelle-Seins だけで足りるからである。我々は――論理的に、或は直觀的に、物理的に、生理的に、心理的に、――ある出來事が他のものに對して、それを制約するかそれに制約されるか、或は如何なる仕方で結合されてゐるか統一されてゐるかを理解せねばならない。しかしこの理解は、之等の出來事を客觀的に流れる時間の内におき、かくしてその擴がりを分有せしむるのでなく、たゞ各々にそれ等相互の相對的位地を與へるにすぎぬのである。

がこゝに到つて一層困難な二律背反の問題が現はれる。いづれの歴史的分子 historisches Atom も(その歴史的分子は我々が知り或は知らんと欲する所に應じて、ある御宇にてもよく戰役にてもよく、或は戰爭にてもよくその戰爭中のエピソード。であつてもよろしい)事實上ある時間の擴がり Zeit

strecke を連續的に滿してゐるのである。ある御宇が單獨に孤立してをつて、何等知られたる內容によつて滿たされてをらぬ時にも、尙客觀的の持續を有してゐる、しかしかゝる場合には之の持續は歷史的には無なるものとして示されたのであつた、何故かならば之の持續はかくて他の時間點に對して先だつか遲れるかを確定する時間點に過ぎぬものとして歷史上確定され規定されたからである。その內に含まるゝ多樣なる出來事も、勿論それ〴〵に對應する他の統一概念 Einheitsbegriffen の下に立つのである。しかしてこの概念と事實（ディベルグンツ）との背反」は歷史一般の全體に廣がつてゐるのである。歷史は、模寫された出來事、個體概念によつて示され得る內容の結合の上に成立してゐる、しかるに現實に體驗される出來事はかゝる形式を有せず單なる時間に密着した裂目のない連續の內に流れてゐて、少しの隙間もないのである。いかなる點

に於ても恐らく之ほど出來事（グシエーエン）と歷史（グシヒテ）との間の裂目を深く覗かせる事はない。我々が七年戰爭によつて考へてゐる歷史的形象には何等の間隙を存しない、正に一七五六年の八月から一七六三年の二月にまでわたつてゐる。しかし實際連續してゐるのは七年戰爭の出來事だけである、卽ちこの時間の範圍に於て、又この戰爭の行はれた場所を示す空間の範圍內に起つた出來事だけである。之の時代の「歷史」は決して連續的ではないのである。ある戰爭の準備されるために連續して行軍がなされ露營がなされる、未だ戰鬪的ならぬ狀態から眞の戰鬪狀態に兵士の行動が連續して變つて行く、戰爭の間に敗走、追擊、しかして戰の後の靜寂が連續して起る――現實の出來事の之の連續性を我々はなるほど抽象的には確信してゐる、しかし探究と想像の助による構成 phantasiemässige Konstruktion とに基いて我々が事實有してゐる歷史的形象は、

非連續的な、言はばある中心的概念の回りに今述べた樣な部分的形象が凝集して成立したものである。我々の歷史構成法 geschichtsbildendes Verfahren は、かゝる各々の凝集點の周圍に互に區別し得る個々の過程の一群を集める、しかしかくの如くにまとめられた全體は、正に「一つの出來事」として まとまつて、最も近接せる出來事からさへ、かへつて全くきり離されたものになる。かくて我々は一七五八年に、ツォルンドルフ附近の會戰に於てフリードリッヒが勝利を得た、ついで彼はその兄なるハインリッヒの救援のためサクソニャに向はんと欲したが、その間ホッホキルヒ附近に於ける襲擊によつて莫大な損害を蒙つた、しかしやがて巧みなる戰略によつて、ハインリッヒとの連絡を達し得た、などと語るのである。それ故こゝにはそれ〴〵に概念的統一 begriffliche Einheit を形成する四つの事件が含まれてゐる、之等の事件はなるほど一定の系列に於て相互に連續するものであるけれど、概念的なる個々別々の綜合なるが故に實は不連續性を示すのである、各々の綜合は他のものと結合するよりも、むしろ自己の一々の部分をいよ〳〵密切にいよ〳〵連續的に綜合せんとする。何人も一七五八年に於ける出來事は完全に連續的なるものなる事を許し、我々がそれに適用する會戰、勝利、敗北、軍隊の合同と云ふ如き概念のみが之の出來事を幾多の部分に分割するのである事を認めるであらう。とは云へこのあとづけられた連續は具體的に表象されたものの平面とは明に異る平面に存するのであつて、決してその縫ひ合はされた所の跡を再びもとの姿にまで消さしめない。從つて極めて注目すべき結果が現はれる、出來事の形式を示すものとして、其のみが現實の相に正確に適應する所の連續的表象は、實は具體的な歷史內容から離れ抽象的に反省された思惟の

産物(シンケ)にすぎず、之に反し之の内容を眞に示してゐる形象は、實在の相とは異なれる非連續的なる出來事の形式 die wirklichkeitsfremde Form der Dis-kontinuität der „Ereignisse“ の内に現はれると云ふ事である。「ツォルンドルフの會戰」は無數に多くの個々の過程を特殊な風に形成して生じた集合概念である。戰史が個々の事柄を明にしてあらゆる攻擊と防禦と逸話と各軍團の一々の交戰をも示しかくて「實際あつた」所の姿に一層近づくに隨つてその度合に應じて會戰の概念は個々の分子に分れて連續性は失はれるのである、元來この連續性は言はばその出來事の上に浮動する先天的知識により、之れ等の知的分子 Wissens-atom の全體を通じて想念的(イデエル)な一線——卽ち戰爭の概念——を貫かしむる事によつて、とにかく之の出來事を戰爭なりと名づけ、かくして之の出來事についてからくも示し得た連續に過ぎぬものなのである。我々がかかる分子を悉く分化し限定された概念の下にもたらすことによつて、それは先だつものと後なるものとに對して孤立せしめられる、我々は今や益々短い不變化的斷片(パルチケル)を認識する事になり、最も近接せるもの同志の間にも、我々の歷史的認識卽ち形象構成にとつては殆んど零にも等しき空虛なる空間が生じ來る。歷史的内容がある概念の下に統一されて、何等かの場合を示す統一として妥當する限りにのみ、その内容は生の形式、卽ち體驗實在の形式——連續——を有するのである。この統一に含まれた時間的に異る一々の部分が確定され名づけらるゝ瞬間にこの統一は分裂し、今や統一は更にその概念的に確定された不變的斷片に屬する事となる。かくて「フリードリッヒ大王の治世」は最初と終りとが結合されて概觀された時には一つの統一である。しかしながら、歷史的意識が、その内より大王の戰爭、プロシャの經濟的開發又彼の

フランス精神に對する關係プロシャ國法の制定と云ふが如き、理解し得る個々の内容を把束した際に、あらゆる之等の要素は自己の内にまとまつたものとなり、自己の中心に向つて引きつけられたものとなつて、他のものとの連續的な結合は、唯之等の空虛な空間に、間斷なき生ける出來事の理念 die Idee eines lebendigen ununterbrochenen Geschehens を挿入して之を貫らぬかしむる事によつてのみ可能なのである。されどかくして生ずる生の形象は一見連續的具體的なるにも關はらず、むしろその模寫されし具體性からまづこの連續性にまで高めらるゝ事を必要とする個々の要素よりも、認識論的には、かへつてより抽象的なる他の平面に存する。かくして一つの統一として見られ得た七年戰爭が、更に多くの會戰と行軍と談判とに分解さるゝ時に、この分裂の過程は更に一歩を進める。しかしてその一々の會戰が再び日々の日程に分れ、それが更に分たれる事は前に既に示した。

かくの如き態度をつゞけて行けば、やがて我々は出來事の分子的構造にまで注ぎ入らねばならぬ樣に思はれる、かくて遂には全く瞬間的形象を有するに到るのである、その形象の一々は他に密切に肉迫しながら決して滿され難き間隙がその間に存するのである。そはその間隙をのこりなく滿たした際には、個々の事件をして歷史的要素たるの役目をつとめしめ、歷史的に記載し得るものたらしめる形象性言はば枠の内に入れて眺め得る性質がなくなるからである。それ故かゝるものによつては、いかに多くの點を以つても一つの線が滿たされ得ぬ如く、かの時間過程に緊密に結びついた生ける連續性にはとても達し得られない。それ故に決定的なる點は、我々が生ける實在流の全體を漏らす所なく歷史的認識にとり入るゝにたるだけ「充分に多くを」知らないと云ふ事ではなくして、

寧ろ我々の認識が、體驗の連續性を示すに足る形式を原理的に有さない點にある、實に、我々が多くを知れば知るほど、卽ち概念的統一として精密に書きうつされた形象を、具體的な相に於いて有てば有つだけ連續性をば言ひ表はしがたき仕方に於いてではあるが直接に我々自らの存在形式として體驗するからして連續性を歷史的事件の內に投げ入れて思惟する事は事實出來る。しかし、我々がかかる統一に對して、益々個別化し益々精密に觀察し行く認識の作用を働かす時には、その度合に應じて、その統一は全き不連續なものの多數に分れ去る、而してその各々は最初はやはり連續的な統一と見られるのであるが、更に認識が一步を進めて行けばそれも同じ樣に分裂して同じ樣に生命が失はれて行く。この分裂の過程が更に進められると、部分的に認識される分子的出來事 Geschehens-atom が再び一つにまとまつた過程に結び返されない程になる、言はば分子がそれ〴〵に有する獨特の意味を失つて、あらゆる他のものとの間に、それ〴〵の內容に基いて理解される結合が生じ得ないほどになる、——しかも之等の分子は、一つのまとまつた過程に結びつかない時には、歷史的のものとは云へぬのである。七年戰爭の個々の會戰は、分離的に見れば任意に其位地を變じ得る分子に過ぎないのであつて、七年戰爭がそれ自ら一個の連續體として理解され、それ等のものに獨自の位置を決定してやるに到つて初めて歷史的要素となり得るのである。しかして七年戰爭は更に十八世紀の政局の內に包容されてのみ理解され得るのである。しかし我々が方向を逆にとつて、下つてクーネルスドルフに於けるプロシヤとオーストリヤの擲彈兵の接戰に到れば、それはロイセンやリーグニッツに於いても全く同じ風に起り得たで

あらうが故に、もはや歴史的の形象ではない。そして一七五九年八月十二日にロシヤ軍、オーストリヤ軍、プロシヤ軍の間に生じた肉體的並びに精神的變化のあらゆるニュアンスを知つても、夫等の事實の系列を示すいかなる概念も　時間的に計量り得る出來事の廣がりをまとめて示して吳れないなら、歴史家の目的とした所は依然として達せられぬ事であらう。歴史の求める所は孤々の出來事を知るには存せずして、それを包括するより高き形象、卽ちクーネルスドルフの會戰を知らんと欲するからである。オーストリア擲彈兵とプロシヤ擲彈兵との戰鬪は、たとへこの會戰のかき難き眞の部分をなすにしても、歴史的に興味ある系列の外にあるのである、もしかゝるものをその系列の内にとり入れるならば、この系列は一つの不連續に解離し行くのである。しかし我々の知らんと欲するクーネルスドルフの會戰はある時間の延長をつらぬいて連續的に廣がる統一である。この統一は形式的には確かに連續的な實在の形象であるけれど、現實的な内容によつては決して充たす事が出來ぬものである、それは、それ〴〵の場合に現はれる之等の終局的個別的形象は、他に先だち或は遲れると云ふ形式 die Form des Früher oder Später を持つには持つが、それと共に非連續性の形式をも有し、かくて點は線の移り行きを示しはするがいかに多くの點も線を充し得ない如く、かの抽象的な直觀に於てのみつかみ得る時間の廣がりを充たし得ないからである。ある現象はその要素の集合として再び理解さるゝのであるが、之の要素への分解はある點まで達すれば、その現象の個性を否定するに到るのである、之は一般的公理であると見る事が出來やう。我々には全く特異なる姿にて與へられるある人の本質を個々の特徵に分解すれば、多くの場合に我々は、その各々の特徵は

他の人もそれを有する如き、要するに普遍的なものたるを發見する事が多いのである。或人の運命は、全體としては類なきものであつても、分解して見れば、その各々は本當によくある事である如き出來事からなつてゐた事がわかるのである、のみか區別をこまかく撰べば、それらの要素は益々自明なものとなるのである。最小部分とその運動とが、唯一の實在と見られてゐる分子的世界觀にとつては、個性の問題は解決され得ない、否問題そのものが認められてゐないのである。それ故かくて、所與が時間的に定位され、從つて歷史的となる所以の所與の個性的特徵は、勿論常にしかるのではないが極めてしば〳〵、要素の分解と特殊化とによつて失はれるのである。しかも一面自然科學的には、之を確實性の增加なりとし「ありしがまゝに」事物を認識せしものとも云ひ得る。從つてこの分解には一定の閾がある事がわかる。すべての兵士のすべての筋肉運動を知る事はむしろその出來事の全體の統一的生命——それが、その出來事の時間的形象の初めと終りを結びつけるのであるが——を失ふ所以である、だから歷史的要素は、その內容の個性が保たれ、それによつて、完全に他のものに對する前後が示され得る程度の大きさを有せねばならぬ。それ故、歷史的認識は延長を有する統一的形象の構成と個々の現實的直觀との妥協の間に絕えず動搖する、——前者の連續性は出來事の形式を寫してはゐるが直觀の個々のものによつて滿たされてはゐない、後者は學的理想に於いては、單に年代記上の一點を示すのみで、それ故に、かへつて現實の出來事の連續性から離れてしまふのである。

歷史學の之の深きアンチノミーに於て、余が歷史學認識論の根本問題なりと考ふる所のもの、卽ち、いかにして出來事(ゲシヒテ)が歷史(ゲシヒテ)となるかと云ふ問題

が現はれてゐるのである。出來事をかつてありしがまゝに模寫すると信ずる歴史的實在論も、又實在とは卽ち實在の認識に外ならずとする觀念論も、生が歴史と云ふ精神的形式を帶ぶるに際し、等しく事實を曲ぐるものなる事が明になる、前者は內容を失ひ、後者は連續を失ふからである。しかし余は、一方體驗されたる生と、他方我々が歴史と名づくるその改作との間に橫はる問題に對して、次の如き希望を掛けたいと思ふ、卽ち之の兩者の齟齬は恐らく最高裁判所の認識論上の判決であつて、決して形而上學上の判決ではあり得ない、何故かならば、一見生と對立せりとも見ゆる歴史が終結に於ては、實は生の、正に同一の生の、顯現であり所業であるからである。けだし生の對立 Gegen-über-vom-Leben は生の一つの形式だからである。歴史實在論のもつ意味は、歴史が如實に寫し出す生の內容に存するのではなく、歴史の避けがたき生との分離 Anders-Sein-als-das-Leben が、この生自身の法則、卽ち衝動的なる力から生ぜざるを得ないと云ふ點に存するのである。

彙報

哲學會例會

四月廿日(月)午後六時より、第十教室に於て東北大學教授ヘリゲル氏の Ansätze zur Metaphysik in der gegenwärtigen deutschen Philosophie なる講演を聞く。教授は現代に於ける二つのカントの復興、卽ちマールブルヒ學派と西南學派とより論を進め、前者が主としてカント第一批判書中 Deduktion に重きを置き、從つてその哲學が transzendentale Logik となり終て、認識論以外の他の問題には充分に接觸し得ず、强いてその方向に走れば最近のナトルプの如くメゴール、ゲーテ等によつてむしろ神祕主義の暗黑に落入るの恐あるに反し、後者は、特にリッケルトに於ては、カントの Dialektik の問題より出發するが故に認識論以外の問題にも立入る事を得て廣汎なる Werthphilosophie を建設し得た。しかし、リッケルトに於てはカントの Faktum der Vernunft の如きものをば單に gelten の世界に於てのみ解するが故に、我々の形而上學的要求は滿足せられない。と云つて現代の哲學はすべてを理性化し形而上化するヘーゲルの汎理論を追ふ譯にも行かない。この時に、現實の世界と形而上の世界とをそれ〴〵の範疇によつて立し來るラスクの、試みは充分に注目に價する。しかしながら、單に對象を受動的に受取ると見る模寫說は、形而上の世界に對しても、カント以後に於ては許し難い、まして單なる Schauen と Erleben とをとくフッサールベルグソンの試みは未だ純なる Philosophieren ではない。ここに於て新なる Subjektive Metaphysik が要求せられる事となる。かくて教授は新形而上學の提唱を以つて講演を結ばれた。後、本部樓上にて茶話會を開く。西田教授、波多野教授、和辻、岩井兩講師、其他多數の來會者あり、盛會なりき。